

宇治市街遺跡(宇治壺番 26 番 2 他)発掘調査の概要

宇治市歴史まちづくり推進課
令和 7 年 4 月 12 日

調査地の住所	宇治市宇治壺番 26 番 2 他		
調査期間・面積	令和 6 年 12 月 16 日から令和 7 年 4 月 18 日まで		発掘面積 250 m ²
調査者・委託者	調査者:宇治市歴史まちづくり推進課	委託者:株式会社東横イン	
発掘主要遺構と年代	平安時代後期:大型井戸、小鍛冶関係遺構、埋め甕、土塋、柱跡など		
	室町時代:集石遺構、土塋、柱跡など		
	江戸時代:埋め甕(お歯黒壺か)、井戸、土塋など		総数 71 箇所

1. 宇治市街遺跡

宇治市街遺跡は、宇治の市街地の一帯に埋没する集落遺跡で、古代からこの地に営まれた宇治郷が遺跡化したものです。古くは古墳時代に遡りますが、平安時代に藤原氏が別業を構えた以降は都市的な発展を遂げ、室町時代には現在の市街とほぼ同規模な町に発展をしています。現在の宇治の町の由来とその歴史過程を伝える重要な遺跡と言えます。昭和 55 年以降今までに約 30 回の発掘調査が行われており、古墳時代前期の渡来人集落、平安時代後期の庭園や邸宅遺構、鎌倉時代から室町時代の家屋遺構、江戸時代の茶師関係遺構などが見つかっています。特に平安時代の庭園・邸宅遺構は藤原氏に関係するもので、貴族の別業遺構として貴重な遺跡と言えます。

2. 発掘で見つかった遺構

今回の発掘調査地は中世に形成された宇治橋通り沿いです。もとは通り沿いに家屋が立っていました。このため、発掘はその南部分を中心に実施しました。遺跡は茶園の土と近年の置土を除去すると 0.5m ほど下で確認できました。平安時代後期(12 世紀)の遺構が最も古く、調査地東端で一辺 3.6m、深さ 2m を超える方形掘方の大型井戸を発見しました。宇治市街遺跡では最大規模の井戸です。井筒は腐朽したか取り出されたかが残っていませんでした。内部からは食器の皿や碗、煮炊用の羽釜、能登地方の珠洲焼の壺破片などが出土しています。また井戸の近くには須恵器の埋め甕がありました。調査地西部では、鉄製品の製造や修理に関する小鍛冶関係遺構が見つかっています。直径約 40 cm の小型炉 1 基と近くに炭・焼け土を含む柱穴などが数か所見つかっています。大型井戸の上層に焼け土や炭を含む層があるため、出土土器からこの小鍛冶関係遺構は平安時代後期である可能性があります。室町時代の遺構としては調査地中央で集石遺構が 3 か所見つかっており、墓の可能性があります。江戸時代ではお歯黒壺かと思われる埋められた小壺や最近まで残されてきた石組井戸などがあります。

3. 発掘調査成果のまとめ

今回の発掘調査で目を引く遺構としては、平安時代の大型井戸と小鍛冶関係遺構があります。大型井戸に関しては通常規模(1m 程度)の 3 倍以上の大きさで、おそらく、平安期の貴族別業に関するものと思われます。当時は本町通りが大和大路でしたので、調査地の南側に別業邸宅があり、その裏にこの大型井戸があったのではないかと思います。今まで平安時代遺構が希薄と考えられた市街地の南西部まで貴族邸宅が存在する可能性が考えられ、平安期別業都市宇治の広がり、現在市街地とほぼ重なる広大なものであったことが理解できたことは大きな成果と言えます。また、小鍛冶関係遺構は、平安期貴族別業の手工業の実態を知るものとして重要な発見だと考えます。

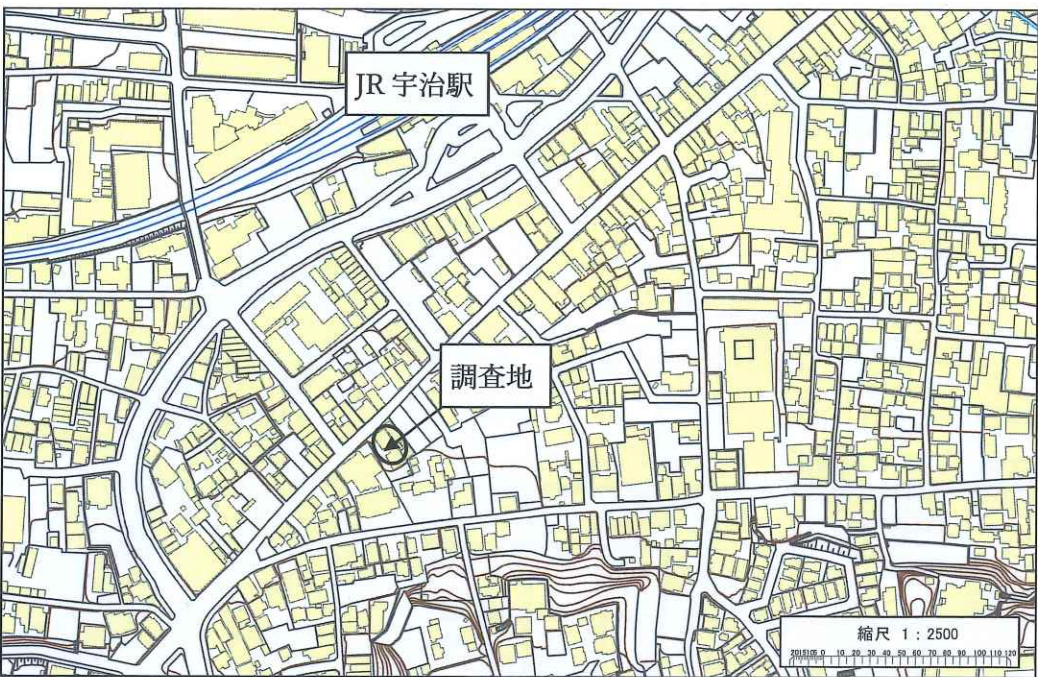


図 1 調査地位置図

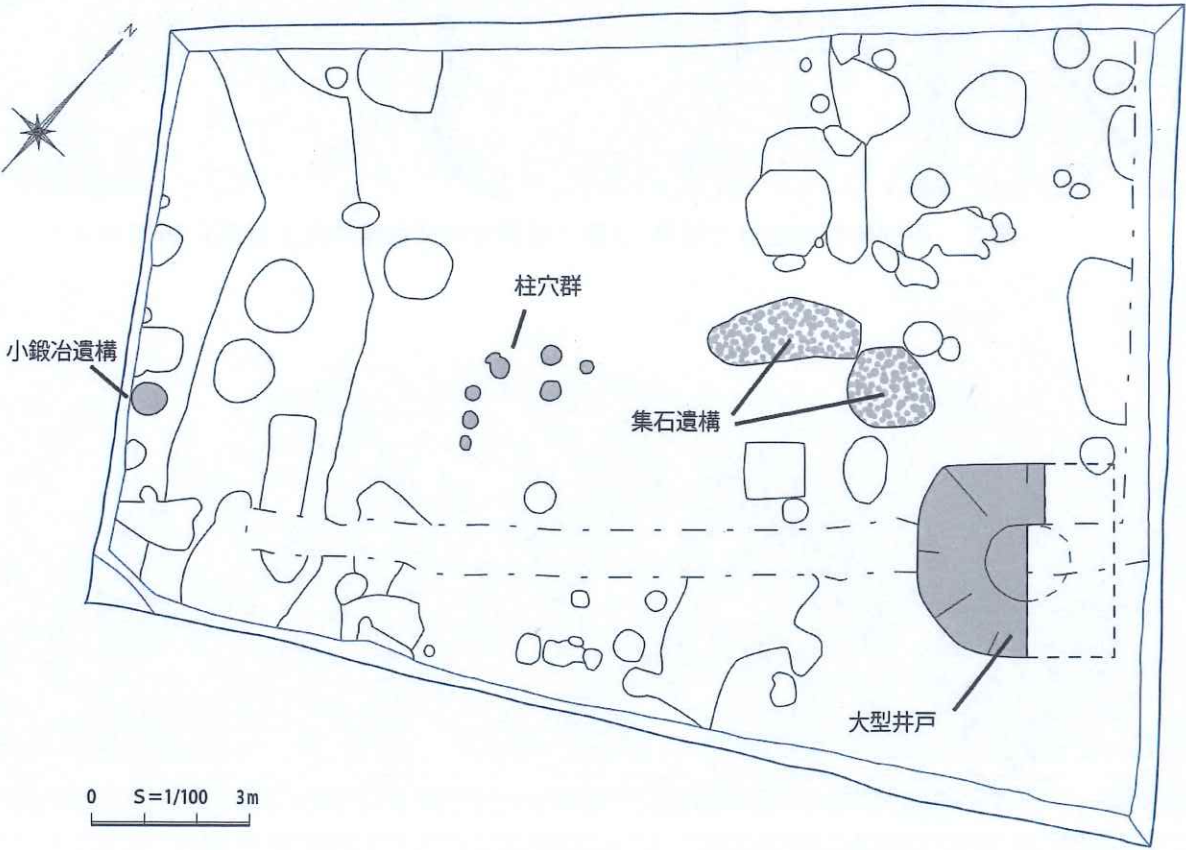


図 2 発掘調査地の遺構略図

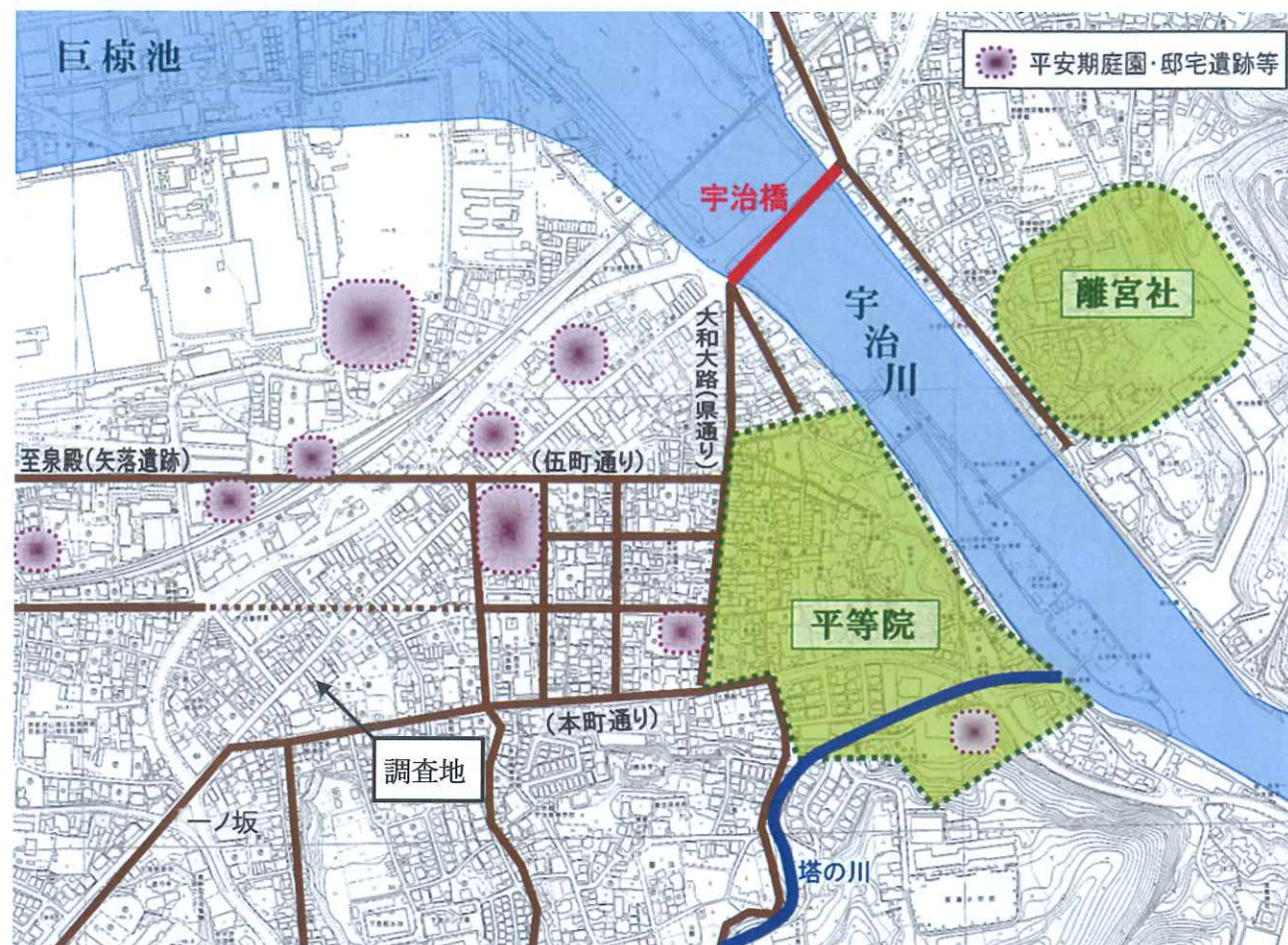


図3 平安時代の社寺と街路（『第1期歴史的風致維持向上計画』2012年より）

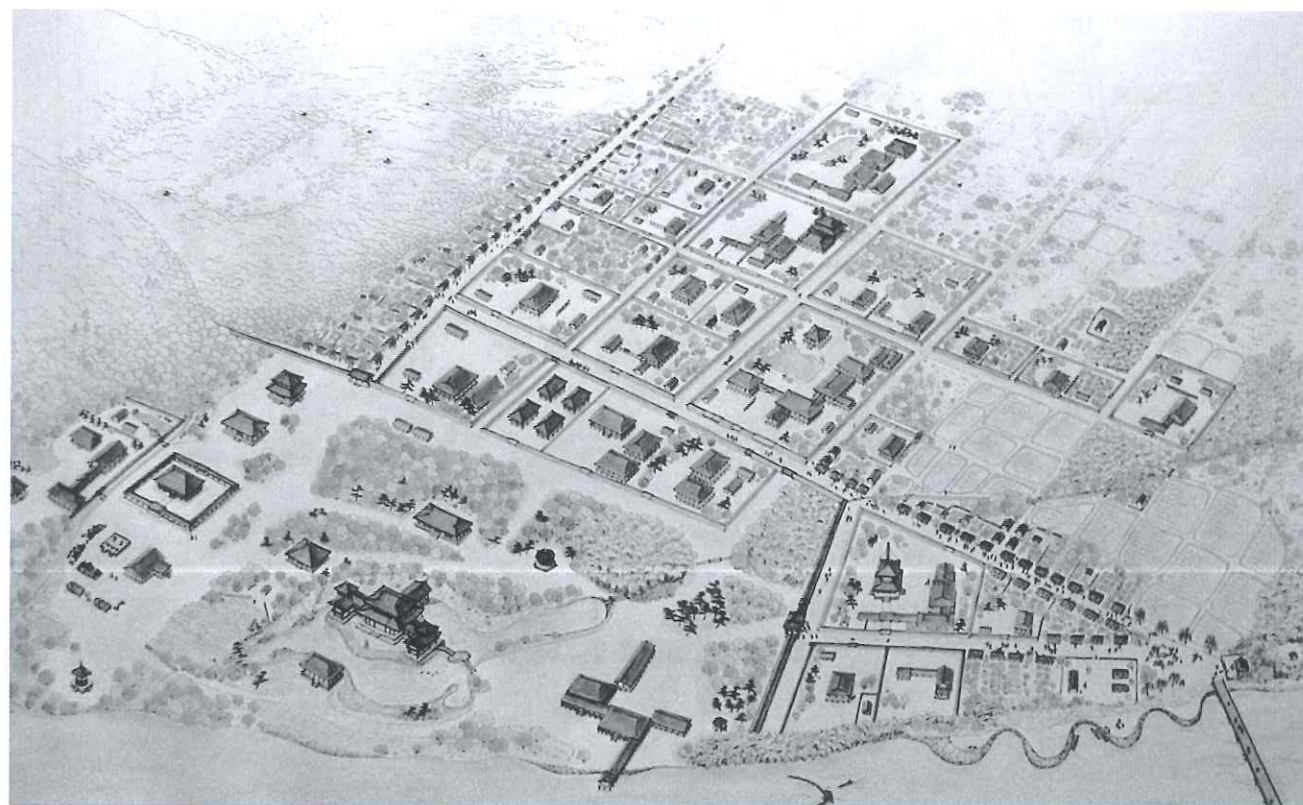


図4 平安後期の宇治市街地の想像復元図（『国宝平等院展』2000年より 早川和子画）



写真1. 調査区全景（南東から）



写真2. 大型井戸跡断面（南東から）



写真3. 小鍛冶関係遺構検出状況（北東から）



写真4. 集積遺構検出状況（南東から）



写真5. 大型井戸跡出土遺物（土師器皿・瓦器碗）



写真6. 大型井戸跡出土遺物（羽釜・鍋）